

これからは、3館の活気、集う人材、強い愛着から生み出される企画実行力を、市内全体にどのように波及させ、まちの活性化を図っていくか、文化の力が期待されています。

小美玉全域を活動エリアとして文化活動を広げていくことにより、これまではずなっていたいなかった住民同士、地域と館、館と農工商観光施設などとあらゆるネットワークが構築されていきます。小美玉市内全域に広がっていくための考え方(マーケティング)と手法を挙げてみました。

1. アウトリーチ(※)

文化ホールの事業を展開していく上で、意識しているのが文化のサイクルです。鑑賞事業中心のときのマーケティングは、あくまでも年代とジャンルでの分け方でした。社会的機関として全住民にどうアプローチしていくかを考えたとき、文化ホールとの関わりが浅く遠いか、深く近いかで6つの層に分け、それぞれを①無関心層・文化芸術未経験層、②文化施設支持層(サイレント・パトロン)、③文化芸術関心層、④観客・聴衆層、⑤文化活動住民(文化団体・地元アーティストを含む)、⑥ボランティア(ポジティブ・パトロン)と呼びます。

このマーケティングで見れば、以前の

鑑賞事業のみの文化行政は③文化芸術関心層④観客・聴衆層にのみ焦点を当ててきたこととなります。これが、文化ホールは愛好家だけのもの、という誤解を生んできた原因です。

※アウトリーチ

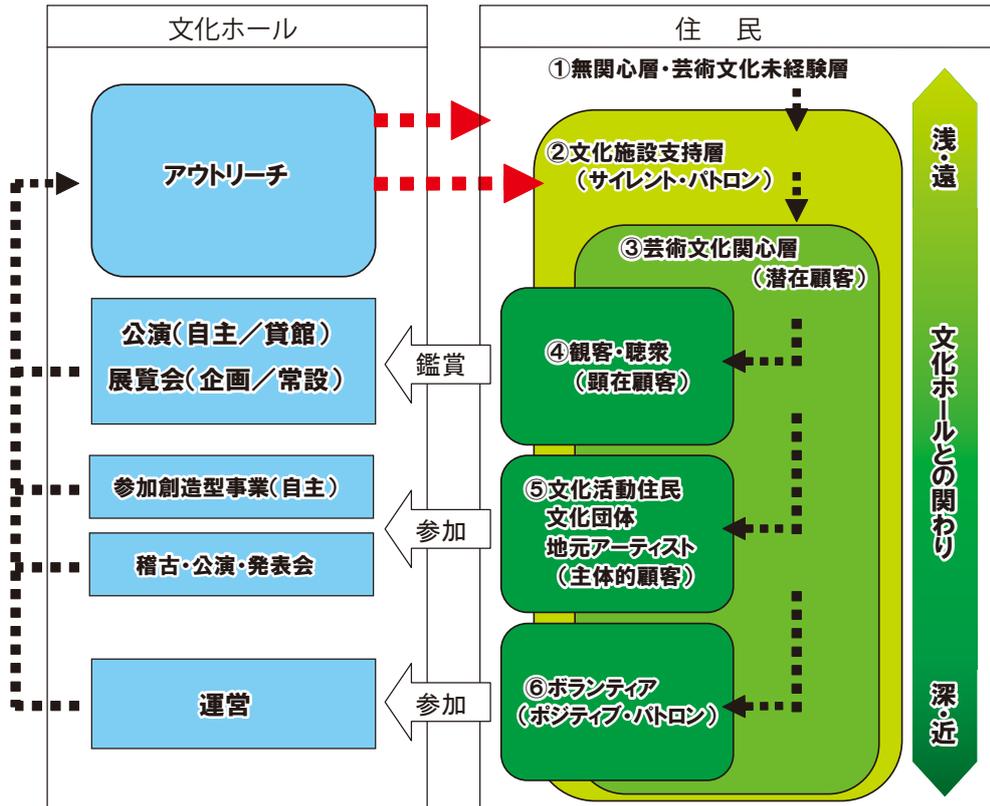
もともと「外に手を伸ばす」あるいは「(地域への)奉仕・援助・福祉活動」「(公的機関や奉仕団体の)出張サービス」という意味。所属劇団・楽団や提携アーティストを地域や学校に派遣し、ワークショップやミニコンサートを行うのが文化ホールのアウトリーチ活動。

アウトリーチの意義

近年、住民自身が舞台上に立つたり、ボランティアとして運営を支えたり、各種講座やワークショップに参加したりと、観客でも施設の借り手でもない、文化ホールと住民の新しい関係が生まれています。

他の事業は、文化ホール側としては住民が自らの意志で参加する「待ち」の姿勢であるのに対し、アウトリーチは文化ホール側の意志で対象を決めることができ、「攻め」の姿勢で取り組めることが最大の特徴です。普段文化ホールを利用しない人でも、その存在意義を認識してくれるように

文化ホールと住民の関係に新しい流れをつくり出すアウトリーチ活動





福田智彦

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

3館の取り組みと今後の課題

1. はじめに

今回のプロジェクトに参加をさせていただき、初めて文化について考える機会を得た。色々な分野のゲストの話やメンバーの意見を聞くことができ、貴重な経験となった。蓮見先生を始め、ゲスト、スタッフの皆さまに感謝したい。ここで得た情報や知識をどう消化して、これから自らの糧にしてゆくのかを考えている。レポートを作成するに当たり、3館のこれまでの取り組みを改めて検証し、課題や展望について考えてみた。

2. みの～れの取り組みと課題

10周年を迎える今も、その建設計画に始まる住民主導の姿勢は一貫し、設立当初の住民の熱い思いはまだ衰えず進化を続けている。地域創造大賞の受賞にみられる通り、その活動は、全国的にも高い評価を受けており、小美玉市文化創造の拠点となっている。住民主体の企画実行委員会が統括した企画運営を行いながら、みの～れ支援隊と各種実行委員会の住民スタッフが直接の支援活動を行い運営の基礎を支えている。また、演劇ファミリーMyuやジョリフォレなど演劇・音楽の住民サークルが育ち、数々のワークショップや芸術展、アクティビティーなどで、子どもから年配層まで幅広い年代の市民を対象にした身近に芸術・文化に接する企画を続けて、開館以来、地域に文化の種をまき続けている。

9年間の成果として市民への文化振興への貢献は、市民の多くが認めるところである。上記の企画・運営の組織体系についても盤石に思える。強い言えば、今後利用層のさらなる拡大ができるのか(公共ホールはどれだけ多くの住民に利用されるかが最重要)と職員や住民スタッフのモチベーションの維持と世代交代がうまく進むかが課題か。公演・イベントでは、いつもよく見た顔ばかりとなっているかも?(喫茶店のつづれるパターン)。

3. アピオスの取り組みと課題

かつては大型ホールを使った歌謡ショーや演劇などの興業型イベントが主体で、施設イメージ、運営方法は、みの～れのそれとはまったく対照的であった。合併後、みの～れからの職員移動を機に活性化委員会が立ち上がり、住民参加型のイベントが数々企画され成功を収めている。なりきり、おやじバンド、小劇場などの大型ホールを有する施設の特徴を生かした企画はいずれも盛況。また、アピオスばるるも発足し順調に活動をしている。閑散としたロビーや暗い受付カウンター、トイレなどが施設改修により明るいイメージとなり、展示スペースも設けられ、公演時だけでなく、人が集う空間に生まれ変わった。

みの～れでの住民参画の手法を生かした活性化の仕掛けは功を奏し、さらにホールの使いかたでは、みの～れの住み分けの道筋を立てた。しかし一方で、育成・住民参加型の企画が乏しく、特に一般市民(特に地元の旧小川町住民)に対して、文化の普及・振興の拠点となっているかは疑問(住民に利用され愛されるホールでなければならない)30周年イベントで、どれだけ多くの新・住民スタッフを発掘し、いかに引き込めるのかが間近な課題。

4. コスモスの取り組みと課題

図書館、史料館、公民館、ホールなども含めた小美玉市生涯学習の拠点となる複合施設で、他の2館とは市行政の所管も含めて異なる立場にある。かつて玉里村時代は、唯一の文化施設として、地域の文化・芸術の拠点として住民

なる可能性があり、アウトリーチは
①無関心層・文化芸術未経験層を
②文化施設支持層(サイレント・パトロン)に変化させる可能性を持つて
います。

◇実践モデル：地域アクティビティ

文化ホールが選抜したアーティストと共に1時間の授業をつくり上げ、小中学校の教室(1クラス単位)にそのアーティストを派遣して授業を行う「学校アクティビティ事業」は、小美玉市内全小中学校で行なわれています。1クラス単位というところがポイントで、息づかいを感じる距離で、キラキラ輝いている大人2人アーティストが子どもたちと交流しています。

ティビティ。区やコミュニティのイベント企画担当の役員と館職員が話し合つて企画を創り込みます。一般論として文化ホールの敷居が高いという意見がありますが、こうしたやりとりが距離感を縮めます。
住民劇団・楽団や文化ホールと提携するアーティストが地域に向いていくことにより、これまで「待っていただけでは対象になり得なかったあらゆる住民が事業の対象となり、文化ホールとの関わりを持つ住民の範囲を飛躍的に拡大していきます。

に愛され、その存在意義が明確であった。しかし、合併後、市内に3館のホールが存在するようになってからは、市の辺境に位置する立地条件もあつたか、市内他2館と比較するとやや活動が沈滞し、存在感が薄くなった感が否めない。数年前から活性化を目的とする、コスモスプロジェクトが立ち上がりC.C.C.(コスモス・キャンパス・コンサート)やコスモスカフェWin-Win、サークル交流会などのイベントが開催されて活気を見せ始めている。

これからのコスモス活性化のキーワードは「コスモス アイデンティティーの確立」と考える。かつてコスモスは玉里村文化・教育の中心であった。様々な分野の音楽・演劇が催され、多くの住民サークルが活動をし、子どもたちが育つていった歴史がある。これからの支えて行く人材はその中に多く存在するはずだ。ただ、玉里地区住民は、行政に対しての住民参画の意識が根差していないために、それを引き出しにくくなるような気がする。そこへのアプローチもコスモスプロジェクトの重要な役割か。また、アピオスがみの～れの手法を取り入れて成功したことにも学ぶことも必要。閑散としたロビーを陽だまり横丁のような展示を目的とした活用をする。チラシだらけの受付周りを整理し、明るいイメージを作り出すことはできないのか?個人的には周辺環境と付帯施設を生かした企画(しみじみの家の宿泊)、特に小学生向けの自然体験を目的とした事業を展開し、コスモスになじみの薄い、美野里地区、小川地区の子どもたちを引き寄せる手段としたい。行政側の人事、予算面でのテコ入れを期待する。

5. 結び

小美玉市の3つのホールを「図らずも生まれた3兄弟」と蓮見先生は喩えた。子育てで重要なことは、兄弟と比較をしないことなのよとTVで尾木ママが言っていた。3館には3館それぞれの成り立ちと歴史がある。それを個性と言うならば、まずはそれぞれの個性を尊重しながら、最大限の愛情を持って育ててみよう。それぞれの長所を伸ばし、課題があれば兄弟の例に習う。兄弟は互いに切磋琢磨しながら、そして地域の人たちに支えられながら成長してゆく。

「3館の住み分け」は、今回のプロジェクトの一つの課題であった。それぞれの個性をほめて伸ばしてゆくことで違った顔つきになってくのではないかと。自ずと住み分けは出来るのかも知れない。

横の連携

— 住民プロジェクトの仕組みを使い込み合おう —

住民プロジェクトが活発になり、参加
 参加住民が増えて大所帯になると、
 組織の縦割りが起ります。異なる
 ジャンルを理解し、交流し、互いに認め
 合いつつ刺激になっている、そんな関係
 づくりが大切です。

◇ 試行イメージ：サークル交流会

から生まれるコラボレーション
 コスモスプロジェクトが着眼したのは、
 コスモスを拠点に活動するサークル同士
 が交流する機会を積極的に設ける
 ことがコラボレーションを促し、新たな
 文化活動が生まれるきっかけになる
 ということです。

初めて開催したときには、自己紹介
 で一周するのに2時間かかりました。
 それだけ理解して欲しい、理解し合い
 たい気持ちが強いです。

現在は交流が始まった段階ですが、
 コスモスという拠点と企画を実現できる
 コスモスプロジェクトという器がある
 ことで、近いうちに表現者たちによる
 コラボレーション企画が生まれてくる
 ことを期待します。

◇ 試行イメージ：みの〜れ住民参画

プロジェクトのコラボレーション
 みの〜れ住民参画プロジェクト
 (みの〜れ支援隊、各種実行委員

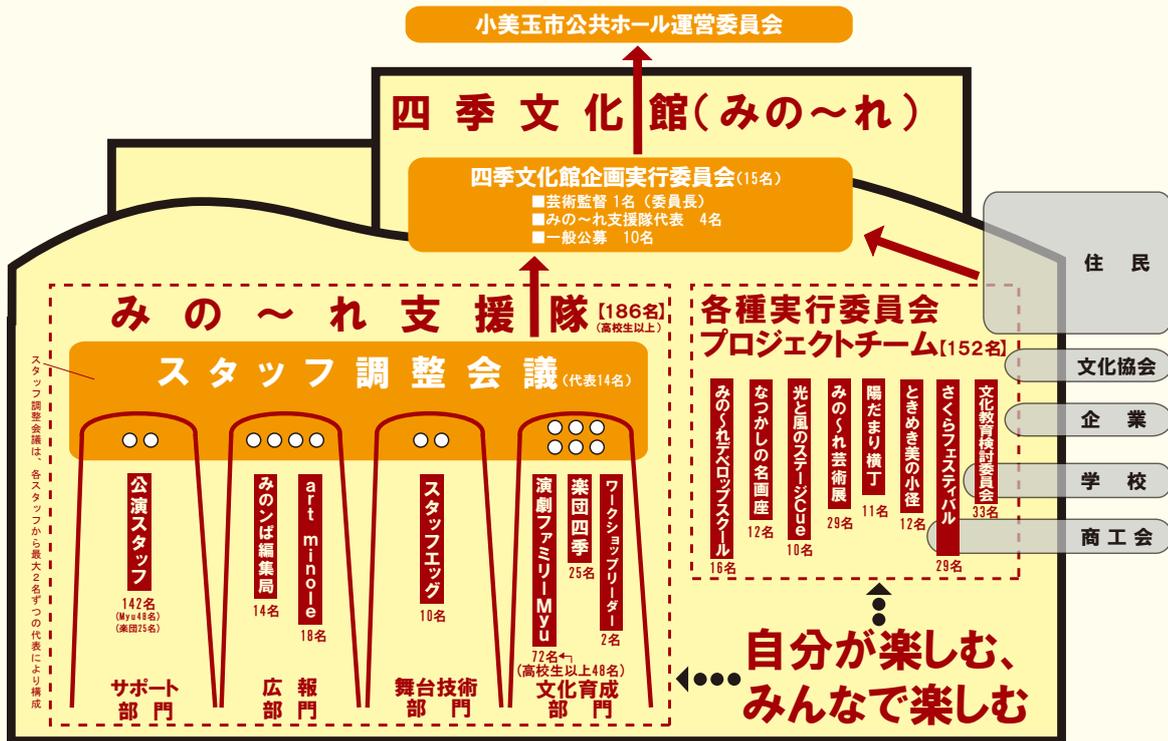
会に参画する住民は、同じプロジェクト
 に長期間参画する傾向にあり、特定
 のジャンルと人間関係の中で活動を
 続けています。様々なジャンルを開拓
 してきたこともあり、新企画をかなか
 立ち上げにくい環境にあるのも現状
 です。

そこで、各プロジェクトが生み出した
 仕組みを生かし、別プロジェクトの住民
 がプロデュースしたり、体験ワーク
 ショップを企画するなど、横の連携を
 図っていくことを推進していきます。
 例えば、「光と風のステージCue」は
 年6回の公演を企画実行しますが、
 そのうちの1回を「なつかしの名画座」
 企画実行委員がプロデュースする実験
 的試みを行い、光と風のステージCue
 メンバーはそのサポートに回ってみる
 とすると、いつもは映画の企画をして
 いる住民委員は、音楽家を探してプロ
 デュースし、照明や音響効果、舞台美術
 を考えるところという新たな体験ができ
 ます。一方で光と風のステージCue
 メンバーは、新規メンバーの獲得の
 可能性につながり、また、サポートする
 中で気づきも生まれるでしょう。

このような「横の連携」を意図的に
 生み出していくことで、新企画を生み
 出すほどの効果を参画住民にもたらす
 ことが期待できます。

【平成 24 年 1 月 6 日現在】

みの〜れ住民参画のイメージ図





田村昇一

小美玉市小川文化センター(アピオス)

計画づくり通して生まれた信頼

計画策定に向けてのワークショップで思ったこと感じたことが3つあります。1つは、自らが積極的に参加するという意識をもつことにより、「やってみよう」と思う意欲が高まり、自分なりに考えようとする姿勢が身につくこと。

2つは、この体験(ワークショップ)は、講義などの伝達スタイルではないので聞いている立場の「お客さん」ではいられないこと、様々な意見交換をするには、知恵を出すため頭が動き、手振り身振りではないが体も動くこと、コミュニケーションにより「人と人」の関係(交流)の中から、和気あいあいとした、良い雰囲気が形成され自然と笑いも生じること。

3つは、グループという集団でルール(時間・役割)を守りながら、自分の考えやアイデアをできるだけたくさん出し、整理してまとめて発表することで、全体で(プロジェクトチーム)共有することができること。

気付いたことは、自らが参加・体験して共同で学びあったり創り出したスタイルとして、ワークショップは「参加」「体験」「グループ」で学習することに意義があるということです。

学習したワークショップの中で、印象に残る(特に頭を動かした)ことが3つあります。

1つは、理想が実現した未来の日記を書く「未来日記を書きましょう」。私は5つほど日記に書きました。グループの共通点として整理すると「みんなで文化を高める気持ちを持っているまち・文化活動によって、市民がまちへの愛情を深めている」という未来日記としました。

2つは、私たちが考える「魅力ある文化のまち」になるための10か条をつくらう。計画に記述したいと思うことなどを個々に書き出し条立てする。グループで立てた内容は、8つの条項としました。

3つは、計画書の柱と戦略を考えよう。これまでのワークショップ、先進事例の講義などで得られたキーワードを出し、計画書の構造にする。グループで出した構造は、文化ホールは「楽しむ・つながり・らしさ・慈しむ」を理念とし、目的は「人づくり」と「まちづくり」としました。

印象に残る3つですが、毎回行うワークショップが非常に刺激的であり、3館で活躍するプロジェクトチームのメンバーと、とても良い交流「人とのかわり」ができたと感じています。また、人それぞれ考え方が違う中で、ひとつのこと(答えを出す)を協力し合いながらやってきたこと(ワークショップ)で信頼感も生まれたと感じています。

文化の楽しさが実感できる事業を発信し、展開していくことが「魅力ある文化のまちづくり」につながると考えます。そのためには、自主事業活動をする中で、新たな事業を企画立案(各委員会)し、出来ることから1歩1歩「あきらめずに」進んでいくことが必要ではないでしょうか。

最後に、公共ホール3館を有することは、財政的負担が大きいですが、魅力的な文化のまちづくりができる条件が整っているという強みがある。まるごと文化ホールを中心とした活動により、まちの文化が守り育てられ、住んでいる人の心にまちへの愛情や誇りを高められると考えます。



前島京子

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

・・・やっぱりすごい！

昨年「チームまるごと」に参加しております。毎回、今度は中本主幹は何をさせるの？とドキドキし、胃が痛くなることも少なくなく、緊張ばかりしておりました。

正直な話、自分の知識不足を感じながら・・・そんな私が、小美玉市の将来の文化ホールのあり方なんてどうすんのよ！わかんないよ！と、心で思いつつの参加です。なんか意味もなく否定的になることもありました。

成功者の体験談・・・私たちにいろんなことを投げかけたり、計画作りのためのキーワード探し、それはそれなりにわかるけど・・・それだからどうなの？今、成功しているから言えるんだよね。そんなふうに見える自分がその場にはいけないかも。葛藤の時間もあり。

でも、集まった皆さんの考え方、文化ホールへの思い・・・心に伝わりました。皆さん、疲れていても(私も疲れていました)、夜、集まり、時間を忘れディスカッションをしている、こんな人たちがいるからこそ、小美玉市の文化は活性化してきたんだなあ！とつくづく思いました。

たくさんのキーワード探し、手段、戦略、理念を考えながら、やはり、いつも思うことは「人づくり」。将来の文化ホール計画に必要なものは、なんだかんだいっても、将来を担うための「人づくり」が、一番大事だと私は思います。

今、元気に頑張っている方たちのような方を、たくさん育てていく「人づくり」これが必要だと思います。

小美玉市には、「チームまるごと」以外にも、3館に関わって頑張っているたくさんの人たちがいます。もっともっとたくさんの仲間が集まってくると確信します。

そのためには・・・今のうちに中本さん!! はじめ、3館の職員の皆さん！仕掛けていって下さい。いろんなことを仕掛けてきた、皆さんならそれが出来るはず。

最後の最後に「レポート」提出があるなんて・・・やっぱり、すごい！今の私には、いろんなことがありすぎて、すみません。こんなことしか書けません。